

# 2010年ムスタグ・アタ登山記録

中道 宏



## 1. 発端と課題

一昨年（平成 20 年）ペルーのワスカランに登ったときにほとんどの行程が重なった、若くてほほえましい林学夫妻から前年に登られたムスタグ・アタの話を知った。7,546mを無酸素ではとても無理と判断していたが、帰国後林さんのHP等を訪問してみると、草原の上に堂々と聳える山容に魅せられ、また登山口がシルクロードの要衝Kashgarであることから、関心が高まった。

同じような関心を持つ山の仲間にも恵まれ、本格的に勉強を始め、その1人Xさん（以下、敬称を略する。）と個人山行を計画し、40日間遠征した。これはその個人的な記録である。

登頂するための課題を挙げればきりが無いが、特に次の5つは深刻であり、真面目に検討し、可能な対応を講じた。

### (1) 高齢

私は山登りを56歳から始めたので、山登り年齢は若く、意欲も高い。しかし、山は意欲だけでは登れないし、すでに71歳で頭も身体も劣化していることは承知している。また人に迷惑をかけるようなことはしたくない。この1年次のような対応により少しでも補うことにした。

長時間の登行に耐える。

夏に露営で、北アルプスの「白馬大池 三国境 雪倉岳 朝日岳 梅海新道」を2泊3

日で、また南アルプスの「両俣小屋 熊の平 蝙蝠岳 二軒小屋」を1泊2日で歩き、また秋には日本山岳耐久レースに出場し、奥武蔵の稜線71.5kmを完歩した。

アパートの階段を負荷をかけ昇降する。

遠征の度に半年間実行していることであるが、自宅のある10階建てのアパートの階段を片足に2kg、背中に19~25kgの負荷をかけ、小1時間で7往復する。現地では10数kgに負荷を抑えるつもりであるが、高度を考慮してのことである。

装備を軽量化する。

有ったがよいものは携行せず、無ければならないものしか携行しない。筋力の不足は乏しいながら金力で補い、軽量化する。いずれも日頃の山行で実行している。

現地ではポーターを活用する。

BCを管理するKashgar Mountaineering Adventures(以下、KMAと言う。)から単価を含め情報を得ていたため、荷揚げ、荷下げに積極的に活用する。なお、BC、C1、C2でポーターから声をかけられたが、KMAが事故に責任をもつポーターに限定した。

## (2) 高所

頂上標高とその前夜の宿泊標高が問題である。今までの例と比較してみると、今回の7,546mとC3(6,800m)のいずれもが厳しいことが分る。

以下は、1)遠征名(年齢)、2)前夜の宿泊標高、3)頂上標高、4)頂上にまでの登降回数、5)頂上到達日数。

1)アコンカグア(63歳)、2)C2(5,800m)、3)6,962m、4)1、5)9

1)デナリ(66歳)、2)最終キャンプ(5,200m)、3)6,192m、4)5、5)13

最終キャンプに7日滞在したが、天候回復せず、撤退。

1)チョー・オユー(67歳)、2)C2(7,000m)、3)7,000m、4)2、5)34

最終キャンプ以降は酸素を吸引したので、無酸素の数値に限る。

1)ワスカラン(69歳)、2)C2(6,000m)、3)6,768m、4)4、5)29

1)ムスターグ・アタ(71歳)、2)C3(6,800m)、3)7,546m、4)3、5)27

このため登顶に至るまでの登降の回数、頂上に到達するに至るまでの日数を十分に採ることとした。なお国際的な名ガイド倉岡裕之さんから登降の回数が多すぎる、休養日をさらに設けた方が良いとの有り難いアドバイスをいただき、計画行程をまとめた。

## (3) 気象予報

BCから頂上を往復するには5日間の好天が望まれる。このための天気予報が不可欠であるが、この情報は価格が高いうえに宇宙衛星電話が必要である(現地では携帯電話が通じるようになっていた)ことから断念した。現地での情報の正確さとこれを有する隊の機動性の素晴らしさに驚嘆し、これを欠いたことは大失敗であり、最後まで響いた。

## (4) 氷河登高

2000年以降の報告では問題ないようであったが、クレバスからの自己脱出と救出について訓練し、装備も用意した。実際には危険箇所もあったが、確保無しでアイゼンまたはスノーシューで通過した。

## (5) 個人山行

Kashgar~BC間の交通手段を用意し、BCを管理する者が必要である。Web等からKMAを選び、最初はメールで、さらにFAX、電話、郵便で接触を試みたが、昨年のウルムチの事件以来あらゆる通信手段が絶たれ、全く返事がない。困っていたところ西安在住のKMA代理の者から連絡があり、さらにはKMAが事務所を臨時に西安に移して連絡できるようになり、最初の基本的な質問から都合15回もメールを往復させた。

個人山行を助ける道具としてGPSを携行することとし、友人に指導を受け、(株)ベルグ(<http://tka.jp/>)で購入し、何度も懇切に指導を受けた。習熟したわけでないが、メモの代替も果たしてくれた。電池の低温対策は効果があったが、残念なことはオーバー手袋で操作することができないことである。

またこの山に不案内であり、体力・技術力も低いことから、まことにずるくて恥ずかしい話

であるが、降雪後は他隊が動いてトレースが固まるまで待ち、かつ他隊の情報から5日間の好天が期待できるときに限り登頂に向かうこととした。

## 2 .Kashgar Mountaineering Adventures

5年前まではKashgar Mountaineering Associationと称していた。Kashgarの中心地に立派な事務所を置き、責任者のMohammadさんは立派な学歴を有し、少なくとも英語は堪能である。かつては日本隊も多かったようであるが、今回は私たち2人だけである。その代わり広くヨーロッパからの隊が多く、またBCの約2分の1から3分の2はKMA関係である。

前項のような経緯でメールの往復が始まり、終始誠意をもって対応していただいた。またこの間日程の変更、員数の変更、国内便の格安航空券の購入もお願いした。

KMAが対応する事務は、EMSで送付した装備の受領と保管、Kashgar空港への送迎、Kashgar市内の買い物等の手伝い(日本語習学生を臨時に雇用していた)、Kashgar市内のホテルの宿泊と朝食、Kashgar～Subash間の送迎とKashgar～BC間の荷物の搬送、Subashにおけるyurtでの宿泊と1日3回の食事、BCの設営と管理(個人テント、食事テント(専用)、シャワー、トイレ、1日3回の食事、給湯、ソフトドリンク、充電)、ポーターの斡旋等である。

BC責任者は日本語、ドイツ語を話す好青年で、良く対応してくれた。以上の経費は2人組みで1人当たり2130ユーロであった。

連絡先は、Kashgar Mountaineering Adventures  
YUDU mansion, 43 South Jiefang  
Road, Kashgar, Tel: +86 -998-2821832, Fax:  
+86 -998-2835444, Email: keyoum@263.net,  
Site: www.ksalpine.com である。

## 3 . 行程

7月14日 北京へ

今回の日程に対応できる格安航空券は上海經由北京行きの中国東方航空だけである。さすが

格安であって、大変手間と時間がかかる。特に帰途は大幅に遅れ、えらい目であった。

7月15日 Kashgarへ

Kashgar 往復も格安航空券である。ウルムチでやたらと待ち時間が多く、おまけに往復とも中国南方航空が大幅に遅れ、いずれもホテルには夜中過ぎて入った。ウルムチの空港では白く輝くボゴタ峰が印象に残っている。

KMAのMr.MohammadさんとMiss Ajiguli(Guli)さんの出迎えを受け、Kashgar 第2の高級ホテルに入る。

7月16日 Kashgar で準備 快晴

北京時間で1時間、現地時間で2時間、計3時間時計を遅らす。

まずKMAで、EMSで送った荷物を確認し、KMAの費用、格安航空券の立替をユーロと元で支払い、緊急連絡ルートに理解と協力を得、またSubashの生活は安全である、BCの責任者はMr.Mohammad Tursunで、彼が貴重品を預かる、Kashgarの買い物にはGuliさんが手伝う、ポーターは保険に入っており、事故についてはKMAが責任を負い、手配はKMAが行うことを確認した。

買い物を済ませ、箱詰めをし、荷物は1日早くSubashに発った。

7月17日 Subashに入る 快晴

14:30、Guliさんの案内でセダンで出発。カラコルム・ハイウエーを一路南下する。ハイウエーとは名ばかり、雨でも降ると危ない。途中検問所の感じが良くない。

17:10、カラクリ湖。



この右側(西側)に回り込み、登る。

18:10、ハイウエーを僅かに離れ、Subash の新しい集落へ、Muhammad さん(彼はこのように書いた。以下、Mと敬称を略する)に迎えられ、yurt に落ち着く。食事もいい。車で富士山の頂上に連れてこられたようなもので、少しふらつく。パルスオキシメーターで計ると80/80(前者がSpO<sub>2</sub>、後者が脈拍、原則朝夕の数値を記す)である。散歩しながら呼吸すると86/70と改善するが、すぐ70台に下がる。

夕日にムスタグ・アタが映えるかと期待したが、残念。明日BCに行く荷から、明後日 Recess Camp に必要なものを抜く。床に就くと少し苦しく、頭には輪が嵌められている感じで、これは初体験である。

#### 7月18日 高度順化

登頂日にとっておきたくなるほどの、素晴らしい快晴。75/65。朝が静かに開ける。



右が頂上である。草原の奥はSubashの本村である。

頭痛は相変わらずである。持参のコンロ4台とKMAから購入のガスとの整合を確認する。頭の調子は良くないが、高度順化のためにトレッキン

グに行く。時々ふらつくが呼吸を整えると、段々調子が良くなって来る。



3時間歩いたがBCは見えない。2つの尾根にトレースが見える。地図(T-Mapsで購入したもの。現地でも同じものを使っていた)上のトレースは右側の尾根であるが、左側が濃い。

8:53、標高3,736m(Subash)、89/72。10:00、標高3,810m、81/75。11:00、94/83。12:00、標高4,015m、97/70。14:00、標高3,736m、83/68。

この5時間の歩きで、手の甲と腕が焼け、5日後には皮が剥けた。陽射しが強い。

#### 7月19日 Recess Camp へ 快晴

83/65。少し頭痛が残っているものの、相当に良くなっている。しかしSubashに一気に高度を上げた以上に、SubashからBCに直行することも心配し、予定通りBCの手前に1泊することとした。昨日歩いた近くのチャウトック集落(4,067m)まではバイクの後ろ乗りで行く。少し歩き Recess Camp (4,209m)とした。



後方(東側)にムスタグ・アタ、前方にパミール高地の Recess Camp。素晴らしい展望である。

ここから見える最高点まで歩いてみるが、BC やそこへの道が分らない。どうもおかしいので、昼食後真西に登ってみると、BC を見下ろす丘 (4,411m) に出た。これで、ノーマル・ルートは地図上のルートではなく、その北側の尾根であることが判明した。午後から雲が出てきた。高度障害も少しずつ良くなってきた。90/68。

**7月20日 BC入り 曇り・晴れ**

85/55。まだ頭が少し痛い。8:00、BCからバイクで来たMに荷物を託し、雪が少し落ちるなかをBCへの道を歩き、9:00、BCに着く。なかなか感じが良い。KMAは他社のところより風当たりが少ないが、崖の大きな石が気になる。



北側の沢の上からBCを見下ろしている。

個人用テントと専用食堂テントに案内され、まず落ち着いてから、MにBCでの生活、ポーター利用を確認する。体調は良くなっている。84/70。



個人用テントの内部

**7月21日 休養、高度順化 曇り・晴れ**

86/56。良く寝、体調も良い。高度順化を兼ね、C1方向に少し歩いてみる。

9:14、BC、4,418m。11:14、4,916m。12:41、ABC、5,147m。14:09、4,418m。4,900m辺りから風が強くなったが雪線まで歩いてみる。ここがABC (Advanced BC) で、テントが数張り張ってある。確かにC1まで一気に1,000m上がるのはつらく、ABCの存在も理解できないわけではないが、これではC1が中途半端である。

下山者はここでアイゼンを外し、荷揚げのポーターはここまでロバで運び、ズックで登っている。89/72。

**7月22日 C1行きの準備 晴れ・曇り 曇り雪**

85/61。体調は良い。朝から小雪。予定より1日早い。明日からC1に行くこと、ポーターの予約、ガスの購入、Safety Boxの利用についてMと打ち合わせ、ポーターにC1荷揚げの荷43kgを渡す。

Kartamark Glacierを観に歩き出すが、天候が悪化しそうなので、引き返す。昼食後霰が叩きつけ、外が白くなる。

**7月23日 降雪で停滞 曇り 曇り・晴れ**

81/57。積雪で外が明るい。C1で50cmとのこと。Mが停滞を勧める、ポーターも行けないと言っている。停滞を決め込み、再度氷河の散策に向かう。85/65。



**7月24日 高度順化のためC1泊 曇り、風が強い**

87/54。10:23、BC、4,404m。14:27、ABC、5,147m。風が強く、寒い。16:42、C1、5,444m。テントを補強し、6泊分の食糧等を整理する。疲れた。70/80。

夜中 SpO<sub>2</sub> が 60 台になっているのに気づき、ダイアモックスを飲む。



**例年はない雪を今年は均し、テントを張る。広いところであるが、なぜか寄り合う。**

**7月25日** C1からBCへ 晴れ・曇り、風が強い

75/55。テント内を整理し、予定通り早く下山する。アイゼンが良く効き、見晴らしが良い。

9:12、C1。9:36、ABC、アノラック、アイゼンを外す。10:55、BC。皆さん山に登っているのか、人影が薄い。装備を乾かし、洗濯をし、のんびり過ごす。85/59。

**7月26日** BC休養 快晴・無風 快晴・風

85/57。過去の記録を再読する。また倉岡さんから紹介していただき、私達より約1週間先行しているSさんからC1～C2間について教えていただき、感謝。

流れが止まっていたKartamark Glacier 側の小川に突然流れが復活する。堰止めされていたものがこの暑さで水が溢れたのだろうか。

**7月27日** 2度目のC1へ 快晴・無風

快調である。天気は明日から崩れると言う予報が信じられないくらいである。

9:00、BC。13:00、ABC、雪線が相当に後退している。14:47、C1。1時間余かけてテントを移設する。C3にタッチし、明日からの荒天のためBCまで長駆下山する日大探検部OB隊に会う。75/53。C1も2回目となるとSpO<sub>2</sub>もあまり悪くない。

**7月28日** 急ぎBCに戻る 雪

夜半から落雷、降雪。天気予報がこんなに当たるとは！！隣のテントの情報では今日から3

日間雪とのこと。さて、どうする。予定はさらに2泊し、C2にタッチする予定である。

とりあえずフル装備で3時間ほど登ってみることとする。2時間弱ほどでアイスフォール手前のクレパス帯でホワイトアウトになったこともあり、C1に戻る。

8:34、5,452m。10:15、5,641m。11:04、5,452m。雪は本降りとなり、各テントとも下山を急いでいる。当方も急いで整理し下山することにする。11:40、C1。12:00、ABC、この辺りから曇に。13:00、BC。

Sさんが見えになり、いろいろお話を伺う。すごい方がおられるものだ。砂漠地帯の高所にあるBCで雨に会うとは想像もしなかった。もちろん傘も用意していない。読書とノート整理で過ごす。

**7月29日** BC停滞 雪・曇・雨

89/59。熟睡、雨が小雪になったようで、外は薄化粧。読書とノート整理で1日過ごす。87/56。

**7月30日** BC停滞 曇り・小雨

無呼吸症候群が出た。雪・曇は止んでいるが、昼前から雨。しかし結構な人が登り始めている。C2・C3への荷揚げの準備をする。その後読書とノート整理で過ごす。

夕方、西の方から晴れる兆しが一瞬見えたが、また小雨。87/69。

**7月31日** 最後の高度順化へ出発 小雨 曇り 晴れ・強風

87/55。朝まで熟睡。相当に冷えた。テントに雪が付き、白くなっている。

7:40、西方に青空、晴れる、行ける。C2、C3への荷揚げを託す。それぞれ14kg、11kg。

9:57、BC。2ピッチ目から風が猛烈に吹き始める。ツェルトを被り、1時間ほど待ち、風が収まらないようなら、BCに戻ることにする。陽が射してきたので、C1に向かうが、八ヶ岳の冬の冷たい強風に似ている。

14:23、X、BCに戻る。14:38、先行者が1人いる。奇抜な人だ。16:20、C1、まず雪投げに1時間。これはえらかった。

荷物を整理し、夕食を摂り、衣類を乾かす。82/79。風は夜中に止んだ。



これだけ掘り起こすのに1時間

8月1日 C1でのんびりXを待つ 晴れ

昨日無理をした?ので調子が良くない。朝食後は82/73。

8時過ぎ、陽が当たってきたところで、また1時間雪投げをし、スノーシュー、GPSのチェックのため少し歩く。X、到着。2人とものんびり過ごす。74/65。



C1を少し登るとセラックス帯にぶつかる。これを避けて左側に回りこむ。

8月2日 C2へ 晴れ

75/65。7:50、C1。手が冷たい。インナーをフリースから毛糸へ交換し、さらに手のひらの上ですり合わせる。こんなことは今までになかった。羽毛も着る。9:55、5,666m。この辺りから景色が素晴らしい。Xに先行する。

11:18 最初のフィックスロープ点を通過。  
11:54、2箇所目のフィックスロープを通過。13:00、6,006m。14:18、6,184m、C2。日大探検部OB隊の隣である。彼らは息が合い、まことに素晴らしい。SpO<sub>2</sub> 65~70と極めて低い。



コンゲールが姿を現す、全容は望めないし



大きなクレバスにはwandsが立ててある、有り難い



8月3日 C3にタッチ

凹凸が激しく、寝づらいので、テントを移設する。結構疲れる仕事である。

C3タッチに向かう。10:25、6,186m、C1。  
11:14、6,306m。12:22、6,411m、ここの辺りからXに先行する。13:16、6,511m。13:41、6,556m。14:38、6,685m、向かい風になり、身体も冷え、手の指も冷たくなってきたのでC2に戻る。

この1時間の降りは疲れた。15:49、6,186m、C1。SpO<sub>2</sub>は不安定であるが、体調は良い。



**8月4日** 休養のためBCへ 晴れ

SpO<sub>2</sub>は不安定である。テント内を整理し、テントを固定し、アイゼンを着け、BCへ。

8:45、C2、フィックスロープのクレパスは少し広がっている。11:00、C1。12:23、ABC、昼食に間に合うように急ぐ。

昼食が豪華、美味しくいただく。洗濯、衣類の乾燥。日大探検部OB隊の登頂を聞き、慶こぶ。Sさんは明日の予定とのこと。88/74。

**8月5日** BC休養1日目 晴れ 曇り

86/58 夜中目が覚め、Xともども確実に登れる策を考え、早朝メモを作り、まずXと、次にMと相談する。ポイントは、C1 C2 C3の移動にポーターを活用、ポーターは自前の宿泊装備等をを携行、これで登頂の可能性がぐっと高まった。

西方の空に天候悪化の兆し、6日、7日悪化し、その後回復に向かえば、当方にとってはまことに有り難い。92/61。

**8月6日** BC休養2日目 晴れ 曇り 夕方から雨、夜半に強くなる。

夜半、無呼吸症候群。90/67。

これまで、7/28~30、3日間 天候が悪かった。7/31~8/5、6日間好天が続いた。このパターンで行くと 8/6~8、3日間悪天が続く。8/9~、6日間程度好天が続くことになる。

隣のドイツ帯の情報では、今日、明日は悪天とのこと。なかなか天候が悪くならないので、縁起を担ぎ洗濯したら、これが効き、夕方から雨に

なった。夜半には大雨、テントの浸水を心配し、Xを起こし荷物をまとめた。87/56。

**8月7日** BC休養3日目 曇り・時々雨 雨 夜半大雨

90/58。のんびり過ごす。ドイツ隊の情報では明日も雨、明後日は晴れとのこと。87/56。

**8月8日** 出発を延期 曇り 時々小雨、夜半大雨

90/54。眠った後大雨に気づかず、1:30、Xに増水していると起される。昨夜と同様荷物をまとめる。小川が増水し、泥流である。方々でヘッドライトが光っている。朝になり、モレーン上のテントが流され、荷物も濡れ、この天気では簡単には乾かないであろう。まことに気の毒である。



**砂漠の上に聳える高山のBCで水害に遭うとは誰も考えなかったに違いない**

登頂に向けたC1への出発を延期した。理由は、C1で30cm、C2、C3で60cmの積雪と言う。降雪後先頭を歩かないという方針を守る。

今日も雨が予想される。雨のなかを歩きたくな



い。時間は十分にある。これまでの6日間好天のパターンに乗る。

また明日以降登頂に向かう隊はBCにいない。60cmの新雪は2人には手に負えないので、C1 C2 C3の荷揚げをする。ポーターAbduが先行し、このトレースを辿り、C3からもAbduが同行するようMが手配した。

これでは大倉喜八郎並に驚篋で登るようなものである。いずれにしろ条件は整った。87/56。

**8月9日** 登頂に向け出発 晴れ 小雨 雪 晴れ

72/71。愈々である。いつもより丁寧にストレッチし、丘に行き、ムスターグ・アタ方向を見ながらラジオ体操をする。天候は安定しない。Stochastic Hydrology で修子論文を書いたと思われる無能振りである。これからは各ポイント毎にGPS上の旗を立てて行く。

BC、100、10:05、4,428m。ABC、102、14:09、5,155m。C1、103、16:22、5,439m。これまでより、ペースが速い。Xの調子が悪そうである。

**8月10日** C2へ 曇り・風 ホワイトアウト 74/65。好天の兆しが無い。Abduに多くの荷を託し、空荷で出発する。例により手の指が冷たく、度々手のひらの上で指をすりあわせる。

C1、106、8:40、5,436m。セラックス帯、107、11:43、5,805m。C2、108、14:50、6,169m。

登頂後セラックス帯を通過するときは疲れているので、ロープを出そう等話しながら通過し、その後はマイペースとする。ホワイトアウトのなかをXが大きく遅れる。当然のことながらC2は静かである。Abduは事前に自分の大きなザックを上げており、隣にテントを張るが、テントのファスナーが壊れたのでBCに降り、明朝上がって来るとして下山。夕方少し陽が射す、良くなるのだろうか。

**8月11日** 結果として停滞 くもり・晴れ 風

8時に出発すべくAbduを待っていると、別人が来た。Abduが病気で来れないので、代わりに自分(アヌニワズル)が来たというが、全く要領を得ない。よく見るとAbduはザックをもって降りている。端から戻って来るつもりはなかったのではないか。

驚いたことにピンチヒッターは、テントもコンロも、翌日分ったことだがヘッドランプも持ってきていない。

携帯電話にMとAbduを出させ、話を聞くがこれまたまことに要領を得ない。6,000mで議論してもどうにもならないので、上に向かうこととした。2ピッチ、200mくらい登ったところで、Xが調子が悪く、下山するので2人で登るよう勧め。とりあえずC2に降り、テントを張る。

いつも下山に強いXのバランスも悪い。このままC1、BCに降りるのは難しい。いろいろ意見の交換はあったが、1休休んでXは1人でBCに下山する。私はアヌニワズルとC3、頂上に向かうこととなった。80/86。

**8月12日** C3へ 曇り

70/61。降りるXと別れ、ゆっくり登る。C2、112、7:23、6,202m。C3、113、12:58、6,805m。相変わらず、指先が冷たく。同じ対応を続ける。600mを5時間半は、前回の500mを4時間20分と同じペースである。

到着後約1時間かけて、交互にテントを掘り出す。疲れた。開けると誰かが利用したとみえて、空きガス缶、ペットボトル、ティッシュなどがある。まずC1荷上げから羽毛のミトンを手にし、安心した。1人用に2人入りどうにか落ち着いた。87/81とも数値は良い。

3人組が通り過ぎる、上に行くようである。次の3人組が正確な標高を訊ねたので、6,800mと教えると隣にテントを張った。同行が2組あるのは有り難い。早めに食事を摂り、明日の装備を着込み、5時出発と決め、寝る。SpO<sub>2</sub>は数値が65~68と悪いが、体調は良く、意欲も高い。

**8月13日** 登頂ならず くもり ホワイトアウト

59/74。3時に起き、昨夜用意したクラッカーをぬるいスポーツドリンクで摂る。テントを叩いていた風も収まり、空には夕方に星が輝いている。運の良さを喜び、登頂を確信した。

外に出ると隣のテントは動き出している。予定通り5時出発。歩き始めてすぐに手の指が今まで異常に冷たい - 密な毛糸の5本指手袋の上に用心して非常用の羽毛のミトンを着けているのに。デナリでも、チョー・オユーでも、ワスカランで

もこのミトンでなく、薄いゴアの5本指で十分であった。

手のひらの上で指をすり合わせても冷たさが取れないので、脇の下に手を入れ肌を掴み暖めるが、すぐ冷えて指が痺れ、ストックをしっかりとめてない。アヌニワズルは事情が分らず、陽が出れば暖かくなると励ます。

先行の隣のテント組は約 430 歩歩いて一休みしているので、私もこれに倣ったが、彼らも苦労しているようで段々近づいた。もう1組のテントの側を通過したが、すでに出発し、先行している。陽は出ず、ホワイトアウトはますます濃くなる。

突然これら2組が下山してきた。このホワイトアウトでは頂上が特定できないので下山することによって(晴れていても頂上を確認することは困難であることが多く報告されている)、すぐ視界から消えた。

さて、どうする。手の指の調子が悪くてもすでに4時間で400m登っている。残り350m、4時間もあれば予定通り登れる。60cmのラッセルはアヌニワズルに任せれば何とかなる。

しかし頂上の位置は秒以下が分らず、GPSに入れていない。また少しは緩和してきたが手の指の冷たさは相変わらずである。一生悔やむことになることを覚悟して、下山することに決めた。降りたことは何も覚えていない。ただC3近くでかなりの人が登ってくるのを覚えている。

C3、114、4:49、6,791m。登頂断念、115、8:43、7,208m。C3、9:40 - 10:40。新テント村、11:20、登るときになかったテント村ができてい。C2よりも大きい。多分BCで隣のドイツ隊が設営し、他も倣ったのではないかと。C2、12:00、ここもホワイトアウトである。下山するアヌニワズルにXへのメモを託す。昼食を摂り、仮眠し、ゆっくり整理した。

翌日下山で一緒になったドイツ隊の若い人と下山後訪ねてきたドイツ隊のリーダーから聞き、少し分ったこと(推測を含む)。天候が回復しないことを知った。C2とC3の中間にC2を設営した。ここから長駆頂上を狙った。リーダー2人と何人かが登頂した。ホワイトアウトでも頂上が特定できたのはリーダーのGPSのおかげである(若者の発言。リーダーは私と同じGPSを持

っており、説明を受けたが理解できなかった)。とにかく強い。C2の降りであった若者はハーネス、ギア等フル装備であった。

8月14日 BCに戻る ホワイトアウト BC近くで小雨

数値定まらず。夕方7時から3時まで熟睡、それから朝6時までまた眠った。少し風があるが、完全なホワイトアウト。テント場はまことに静かである。7:05、C2。テント内を整理し、アイゼンを着け、出発。ホワイトアウトはますます濃くなる。手の指の冷たさは相変わらず。上(彼らのいうC2)からドイツ隊の若者が降りて来、セラックス帯で一緒になったので、少し様子が分ってきた。ホワイトアウトで何も見えないなか、彼が旗を見つけ、先導してくれたのは助かった。

8:19、C1。8:35、C1。ここから1組2人にしか会わなかった。そろそろこの山も店じまいか。9:00、ABC。手の痺れが抜けない。BCに近づくと小雨になり、BCがぼんやり見えてくる、大分数が減っている。10:30頃BC。Mが迎えてくれる。お礼を述べる。Xとビールをゆっくり飲む。

カラコルム・ハイウエーは15日まで不通と聞き、下界でも荒天であったことを知る(中国、パキスタン、アフガニスタンで災害が起きていたことを後日知る)。

C1、C2の荷物が届き、乾燥させる等整理する。ドイツ隊のリーダーがGPS持参で相談に来る。テントを無断使用したらしく、それが私のテントであったかどうか確認したかったようである。頂上の位置は彼のGPSでは、N 38 16 32.6、E 075 06 57.9、EL 7556 とのことである。夕食事、無料のビールでなく、50元、50度の酒を遅くまで飲むが酔わない。93/61。

8月15日 整理 雨・曇り 時々陽が射す

87/59。5時半まで熟睡する。今日から天気とSpO2を気にする必要がない。登れなかった悔しさがじわりと湧いてくる。これがいつ断ち切れるか。酒も残っていない。

荷物の乾燥、整理、清算等で結構忙しい。Kashgarのホテルが大旅行オペレーション・シーズンと重なり、なかなか予約がとれないらしい。ポーランド隊7人、ドイツ隊18人に私達2人では大変だろう。

夕食後暗くなってからC3の荷物が届く。撤収が困難な作業だったことは理解できるが、愛用のテントが壊されている。昨日の酒を飲みながら、ゆっくり整理していると、ホテルが取れた。7:30朝食、8:00出発と告げられた。狭いテントのなかで夜中までパッキングに忙しかった。98/56。

8月16日 Kashgar へ 曇り

85/86。5時に起き、ヘッドランプを点け、濡れたテントを畳む。皆で写真を取り、駱駝への積み込みは任せ、BCを離れる。

水害の被害は各所に出ている。小川を渡るのに苦労した。3時間弱で駱駝より少し早く着き、最後の昼食をご馳走になる。何度もムスターグ・アタを振り返ったが、ついに全容を見せることはなかった。帰途のカラコルム・ハイウエーの被災状況は激しく、早く帰れた運の良さに感謝した。



左から Abdu、私、Muhammad、コック長



## 4. キャンプサイトの風景

(1) Subash 3,706m

Kashgar からパキスタンに通じるカラコルム・ハイウエーからすぐのところに本村から離れて yurt (壁がコンクリートで作られたパオ) 群があり、KMAも数棟持っている。

標高からすれば、ヤクやロバが草を食む、富士山の頂上にある広い平原から、富士山より高いコングールやムスターグ・アタを見上げている感じである。

当然ながら初日にはすぐ高山病の症状が出た。すでに携帯電話の中継塔が建てられ、ビル工事も進められているので、いずれ良いトレッキング基地になるだろう。



中は広く、天井が高く、住み心地が良い。



yurt の前からコングール峰も望める。

(2) Recess Camp 4,209m

用語が適切かどうか分らない。Subash から一気に BC に入っては高度順化しないと考え、KMAに相談し、途中1泊した。ムスターグ・

アタを背にパミール高原に対峙し、チャウトック集落を見下ろす、なかなかいいところである。



下の道をバイク、4輪駆動車がBCに駆け上る。

(3) B C (Base Camp) 4,418m

9年前に比べると格段の発展しているとSさんが話しておられた。各エージェントの大小のテントが並び、賑やかである。ヨーロッパから大半を占め、日本からはSさんや日大探検部OBのウエックトレック隊だけである。米英はいなかったが、なぜか共通語は英語である。

上水は上部から湧き水を細いパイプで引き、シャワーや洗濯のお湯を豊富に供給してくれる。下水はテントサイトを流れる小川に捨てている。ゴミは分別ではないが1箇所に集積している。トイレは穴を掘り、囲っただけの移動式である。最大の日課の食事はKMAの場合は8時、14時、19時半で、ほとんど狂うことはない。もともとヤクの放牧地で、荷揚げのロバも多い。彼らの落し物が散在しているので、踏まないように注意が必要である。ロバや駱駝の鳴き声にはしばしば驚かされた。



(4) C 1 (Camp1) 5,544m

平年はC1には雪は残っていないようであるが、今年到着したときには雪線はABC(5,147m)であった。都合4回往復したが、最後にはC1近くまで夏道が現われていた。風が強く、寒い。少しでも平らなところを求めたためか、歩くにも、雪を投げるにも不便なくらい寄り集まっている。



(5) C 2 (Camp2) 6,186m

もっとも重要である。広く展望も良く、C1ほど風が吹かない。



(6) C 3 (Camp3) 6,805m

最終テントサイトである。それぞれの作戦でどこでもテントを張れる。私の場合は隣に1張りのみであった。残念ながらなぜか写真を撮っていない。

(7) 登山者模様

KMAへの支払い、BCでのガス・カートリッジの支払いがユーロ表示になっているように圧倒的にヨーロッパ人が多い。それも各国にまたがり、多彩である。彼らとはとにかく何にて

も強い。まず高度に強い。私の半分の期間で登頂を終了する。寒さに強い。標高4,400mで陽が射していないのに半袖、半ズボン姿を見る。相当の荷物を持つ。食糧も私と異なり重量物を豊富に持ってきている。酒も強い。登頂したドイツ隊は連夜朝まで飲んでいた。

C1、C2で大勢の、しかも女性交じりの、イラン隊に遇った。とにかく賑やかである。歩きながらも良くしゃべっている。夜には歌まで歌う。歩くペースは私と同じだったが、弱者には荷を持たせないで、列を乱さず歩いていたのには感心した。

教授、学生からなる韓国隊にもよく遇った。強く、天候の悪いなかでも頑張っており、なかなか好感の持てる隊であった。

日本人は日大探検部OB隊と単独のSさんだけである。多くの情報をいただき感謝している。皆さん見事に登頂された。Sさんは25kgを担い、毎日400m高度を上げられ、強い日本人を代表されていた。

#### (8) 休養日

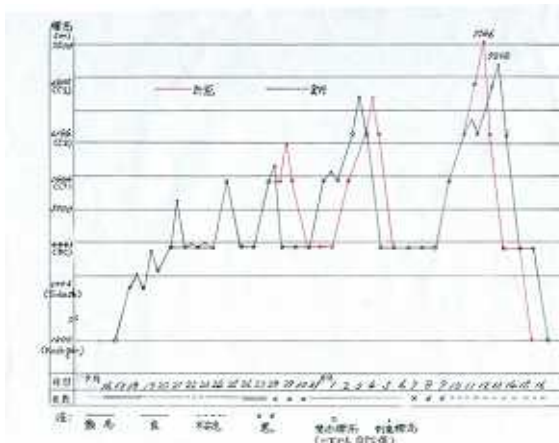
天気待ちと積極的な休養があるが、登高計画を練る、荷揚げについてポーターを手配する、装備を整理する、天気情報を探る、散歩する、など結構ある。今回も例に倣い、堅い本を3冊持参してよかった。史記列伝の夷狄関係の分冊、「土の文明史」、「これからの「正義」の話をしよう」である。息子からプレゼントされたipodもよく聴いた。洗濯は乾きが早いのが有り難く、比較的よくやった。

#### (9) 食事・酒

BCの食事については事前に十分相談したこともあり、草食系の素晴らしいものであった。C1やC2のインスタント食の味気なさとかカロリー不足補うだけでなく、務めてゆっくり食べ、愉しんだ。酒はこれも例に倣い3000mを越えてからは口にしていない。下界では毎日飲む身ではあるが、それほど苦にはならなかった。

## 5. なぜ登頂できなかったか

「1. 発端と課題」で整理したように、当初から私には難しい山と捉えていた。しかし現地に来て風邪もひかず腹もこわさず、高度順化も比較的うまく行っていた。日程も下の図にみるように当初計画したとおりに順調に消化した。



次の図は、BCを出発し、撤退するまでの軌跡をgoogle earth上に重ねたものである。



セラックス帯の拡大図 (旗 103, 106 はC1である)

## 旗番号の位置

旗番号・地点・日付・時刻・北緯・東経・標高

- 100・B C・09-AUG-10・1:05:26PM・  
N38 17.434・E75 01.513・4,428m
- 102・A B C・09-AUG-10・5:09:05PM・  
N38 17.380・E75 02.732・5,155m
- 103・C 1・09-AUG-10・7:22:23PM  
N38 17.333・E75 03.169・5,439m
- 106・C 2・10-AUG-10・11:40:45AM  
N38 17.332・E75 03.167・5,436m
- 107・セラックス帯通過・10-AUG-10・2:43:43PM・  
N38 17.284・E75 03.754・5,805m
- 108・C 2・10-AUG-10・5:50:18PM・  
N38 17.103・E75 04.353・6,173m
- 109・C 2・11-AUG-10・1:23:17PM・  
N38 17.101・E75 04.351・6,169m
- 112・C 2・12-AUG-10・11:23:41AM・  
N38 17.106・E75 04.353・6,202m
- 113・C 3・12-AUG-10・3:58:25PM・  
N38 16.800・E75 05.358・6,805m
- 114・C 3・13-AUG-10・7:49:18AM・  
N38 16.802・E75 05.357・6,791m
- 115・撤退地点・13-AUG-10・11:43:32AM・  
N38 16.571・E75 06.139・7,208m

(注)時刻は日本時間、現地時間は-3時間

B Cでも体調もよく意欲も高く、早く登頂を目指したいと願い、C 3の朝には登頂を確信したくらいであった。しかし想定しなかったことが3つあった。

1つは、ポーターの理由のわからない突然の交代とXの登頂断念である。後者は特につらいことではあったが、気持ちは別として登頂については何ら影響していない。C 2に余分に1泊したが、SpO<sub>2</sub>は悪くなっていないし、疲れもなかった。

2つは、天候が期待と異なり改善しなかったことである。天気予報を購入しなかったのは準備段

階からの失敗であるが、天気予報が8日の時点でずっと悪いとされた場合、登頂を断念し、帰国していただろうか。それともドイツ隊のように僅かなチャンスを求めて果敢に登頂を目指したのだろうか。私はこれまでのパターンから行けば、またこれまでの記録からすると、晴れるはずであると考え、出発したが、これが当たらなかった。

しかし、深雪にはポーターを同行する等の備えもしており、後発のドイツ隊の何人かは現に登れたいくらいの天気であった。ただ天候が悪化することに怯え、また期待の好天にならなかったことから気力が落ちたことは否めない。先行の2隊が下山したのもこれに拍車をかけた。

3つは、手の指の冷たさである。今考えてみると、今回の遠征では早くから出ていた症状であり、高度が上がるにつれ顕在化していた。初めてのことであり、手袋で簡単に防げると考え、C 3に荷揚げしていた羽毛のオーバー手袋に異常なほど期待をしていた。

しかしこれが効果がないと分り、身体に何かが起こっているのではないかと愕然とした。この2と3に個人山行の乏しい知見を重ね、登頂を断念した。よい判断だったかどうか永久に分らないだろうが、すでに何回も悔いている。逆にそのまま登り続けたら、天候悪化に対抗できたか、手の指はどうなったかを考えることはほとんどない。

人は都合よく考える典型的な例である。この遠征では登頂については不首尾に終わったが、計画から実行まで多に愉しんだ。また多くの方のご理解、ご指導と応援をいただいた。まことに有り難いことであり、感謝申し上げます。再挑戦したい山であるが、登りたい山がたくさんあり、年齢とも相談しないとイケない。この算段もまた愉しいことではないか。

詳細：下記URL参照

<http://imayamahe.world.coocan.jp/muztaghata.html>